

『生と死への眼差し』 村上陽一郎（青土社）

あふれる死のイメージ

人称で考察する「死」

独自の視点から死の現実と言説を解剖

人々の平均寿命が伸び、日本ではもはや戦争や飢餓で人が死ぬことはなくなつた。乳児死亡率もほとんどゼロに近く、我々の日常から「死」の心配が、ちよつと消毒によつて菌をぬぐい去るように、失せようとしている。

しかし、我々のイメージと想像力の世界では、「死」の形象や言説は、かつてないほどまでに溢れかえっている。「脳死」「安楽死」「AIDS」。映画を見れば、残酷な殺人のシーンが執拗に繰り返される。

現代において「死」は隠蔽されていると言つたのは誰だつたか。現代ほど「死」がグロテスクな形で我々の脳裏を支配している時代も、珍しいのではないか。

村上陽一郎の近著『生と死への眼差し』は、現代の「死」と「医療」をめぐる現実と言説を独自の視点から解剖し、静かに、そして慎み深く、「死」への思索へと沈潜してゆく知の軌跡である。

村上は、ジャンケレヴィチにならつて、死を人称と結びつけて考察する。

死はつねに第三人称、つまり「彼／彼女の死」として現れる。目の前で息を引き取る他人について、我々は「彼は死んだ」と冷静に言い放つこと

ができる。

これに対して、第一人称の死、つまり「私の死」は、決して体験されたことのない、未知の何ものである。それを論理的に知ることはできない。私は自分の死を、完全な孤独のなかで、「絶対の孤」のうちに引き受けなければならぬ。

第二人称の死は、微妙な位置にある。それは一見、第三人称の死と似ている。しかし、たとえば「彼は死んだか」と問えるのに対して、あなたに向かつて「あなたは死んだか」とは問えない、と村上は言う。この点では「私の死」と似ているわけだ。だとすれば、第二人称の死は、「他者の死であると同時に……自己の死に限りなく近づくものである」ことになる。

村上は、第二人称の死がもっている、この特異な性質に注目する。そして、絶対に知ることのできないはずの「私の死」を、第二人称の死という窓口を経由することによつて、すくなくともある形で「掴む」ことができるのだと言う。

ここが、本書の最大のポイントである。

第二人称の死、たとえば親の死は、少なくとも私にとっては「私の死」にほとんど一致する。そのような「あなたの死」を媒介項とすることによつて、我々は、「人間」の地平から「絶対孤」の地平へと、最後の通路

を切り開くことができるのだと村上は主張しているように見える。

村上にとって、この通路はまた宗教性が開示される通路でもある。宗教はこの「第二人称の死」に依存していると言つ。彼が、本書の最後でつぶやいている、「第二人称の死によって磨かれる」という境地の真意は何か。

脳死問題を、村上と同じように、人称の視点から思索したことのある評者にとって、村上の指摘は見過ごすことのできない重要性を秘めている。

ただし、村上が第二人称の死に関して、「あなたは死んだか」と問えない、と述べている点は疑問が残る。たとえば、死んだ父親はまだ私のこのころのなかにある意味で生き続けており、そのころの中の父親に向かって、「あなたは死んだのか」と問いかけることは充分可能だからである。そして、評者は、このころの中のあなたに対して問いかけるときの、「関係性」と「超越性」の微妙な両立こそが、「私の死」と「人間」を結ぶ蜘蛛の糸になりえるのではないかと感じている。

いずれにせよ、村上が本書で提出した問いは限りなく重い。評者は、死

『親指Pの修業時代 上・下』 松浦理英子（河出書房新社）

男と女の関係性を再吟味させる 悪夢

異常に理知的なビルドダウンクス・ロマンの童話

徹底した脱構築の実験をへることでより豊かな「視線」と「知性」をこの世界に振り向けることに成功している

に関する村上のさらなる思索の深まりを、最後まで見定めたいと思つている。

『週刊読書人』第二〇一〇号 一九九三年一月一九日

おまけ

村上陽一郎先生を最初に「見た」のは、東京大学の科学史のゼミ。私のようなもぐりが何人かいたような気がする。その後、大学院生のときに研究会などでお会いするようになった。なんというか、独特のシャイで柔らかな人柄が、若者たちを惹きつけていた。研究会が終わると、早足で「ぼくは先に失礼します」と言つて去つていく姿がかつこよかった。というわけで、私もファンだったわけです、はい。この本は、なんとも重い読後感だった。

小説家の想像力つて、ほんとに常軌を逸しているもんだ。私もむちゃくちゃな想像力にかけては人後に落ちないつもりだが、この人には負ける。

ある日とつぜん、主人公の若い女性は、自分の足の親指が「ペニス」になつていてを発見する。それは刺激すると勃起するし、射精に似たエクスターシーも感じる。こつやつて、一美はジェンダーのはざまに立つ存在